

万葉集における連体修飾—現代語との比較を通して

著者	鍵本 有理
雑誌名	國文學
巻	78
ページ	373-388
発行年	1999-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10112/6196

万葉集における連体修飾

—— 現代語との比較を通して ——

鍵 本 有 理

一 はじめに——現代語の用例による考察——

日本語の特徴の一つとして、連体修飾句を作るのに特別の形式（関係代名詞など）を必要としないということがよくいわれている。

例えば、

鈴木^Aさんが 今週^Bの火曜日^Cに 神田^Cの本屋^Dで 本^Dを買っていた。

この文を、A・B・C・Dを中心とした連体修飾句に書き換えると、それぞれ、

A 友人^Aが 今週^Bの火曜日^Cに 神田^Cの本屋^Dで 本^Dを買っていた鈴木^Aさん^Bを見ています。

B 鈴木^Aさんが 神田^Cの本屋^Dで 本^Dを買っていた今週^Bの火曜日^Cは、ただ しか雨^Bが降っていた。

C 鈴木^Aさんが今週^Bの火曜日^Cに本^Dを買っていた神田^Cの本屋^Dは、わたしも行きつけの店^Dだ。

D 鈴木^Aさんが今週^Bの火曜日^Cに神田^Cの本屋^Dで買った本^Dは、何の本^Dだったのですか。

のようになる。^{off} A・B・C・Dそれぞれが被修飾語、「底の名詞」^{はじ}となり得る。

しかしながら、現代語においては、どのような場合でもこのような「述定」から「装定」への転換が可能というわけではないようだ。

次郎^Aが太郎^Bをなぐったを装定に転換すると、

太郎^Aをなぐった次郎^B
次郎^Aがなぐった太郎^B

次郎になぐられた太郎

が考えられる。たかはしたるうは、この例について、

文のなかの名詞のひとつをうしろへまわせば、いつでも動詞句と名詞の対になるといふわけのものではない。例えば、「太郎をなぐった次郎」というタイプは、かなりあるのだが、「次郎がなぐった太郎」というタイプはほとんどなくて、ふつう、そういうばあいは、次郎が文の主語であれば「なぐった太郎（次郎が）なし」となり、次郎が文の主語でなければ「次郎になぐられた太郎」となる。

と述べている。¹⁰⁾

そして、被連体修飾語になる名詞の格に優劣があることも指摘されている。

にいさんは 東京から はたらきに いきました。

夜行列車は 上野駅へ 出発した。

これを、

にいさんが はたらきに いった 東京

夜行列車が 出発した 上野駅

とすると意味が変わってしまう。主格・目的格は被連体修飾語になりやすいが、このような起點格（から）や目標格（へ）などは制限があるようである。¹¹⁾

また、次のように「述定」から「装定」への転換が不可能なものもある。

誰かが階段を下りてくる足音

さんまを焼く匂い

狐が狸を化かした話

食べる楽しみ

寺村秀夫は、連体修飾について整理し、「述定（ネクサス）」に展開できる、いわば修飾部の用言と被修飾語になる名詞に格関係があるものを「内の関係」、このように「述定」に展開できない、被修飾名詞が修飾部に納まらないものを、被修飾語が「外」から来たものであるとして「外の関係」と呼んだ。また、「外の関係」における修飾部は、どのような音か、どのようなにおいか、という被修飾名詞の「内容」に関する限定を行うものであると指摘している。なおこの「外の関係」においては、修飾部が用言一語であることはなく、それ自体が文として成立する、完全な節がくる。

さらにこの二つの中間的なものとして次のようなものがある。例えば、

よしまやし恋ひじとすれど秋風の寒く吹く夜は君をしぞ思ふ

の現代語訳「秋風が寒く吹く夜」を述定に展開すると、

（万葉集 10・二三〇二）

夜、秋風が寒く吹く

となるが、この「夜」はなくとも文として成立する。この「夜」のような時・場所を表す語は「状況語」とも言われるが、文の成分としては「外的」なものである。つまり、必須のものではない。また「どのような」夜か、その内容を限定する場合も多い。このようなものを今仮に「外的な関係」として区別しておこう。^(註)
現代語における連体修飾については他にも問題はありますが、今はこの辺で措く。

さて古代語においても連体修飾の例は多く見られるが、現代語以上に自由に連体修飾句が用いられているようである。古今集の例について、佐伯梅友^(注)は次のように述べている。

人の前栽に 菊に結びつけて植えける歌(二六八題詞)

という言い方がある。これで見ると、歌を植えたのかとも言いなくなるようであるが、言わばこういうのんきな言い方が、普通のこととしてよく行われるのである。

なき渡るかりの涙やおちつらむ 物思ふ宿の萩の上の露

(二二二)

君こふる涙(五六七・五七二)

君をのみ思ひ寝にねし夢なれば わが心から見つるなりけ

り(六〇八)

待てといはば寝ても行かなむ しひて行く駒のあし折れ

前の棚橋(七三九)

これらはみな、「物思ふ」「君こふる」「君をのみ思ひ寝にねし」は作者自身のことであり、「しひて行く」のは駒ではなくて人である。まことに自由自在である。

和歌という定型に整えるためにやむなく使われたものもあろうが、現代語とは少し様相を異にするようである。論理的格関係が重視される現代語と違い、古代語では感性的表現、係り結びや喚体句が使われる。連体修飾句においても、現代語の論理をそのまま当てはめにくいものがある。

勿論現代語と同じ構造の連体修飾句も多い。万葉集から目に付いたものを少し挙げる(なお本稿における万葉集の引用は新編日本古典文学全集に拠る)。

(主格)

夏野行く小鹿(夏野去小牡鹿)の角の東の間も妹が心を忘れて

思へや(4・五〇二)

春日野に咲きたる萩(春日野爾咲有芽子)は片枝は未だふふめ

り言な絶えそね(7・一三六三)

(目的格)

秋さらば移しもせむと我が蒔きし韓藍の花(吾蒔之韓藍之花)

を誰か摘みけむ(7・一三六二)

石見の海打歌の山の木の間より我が振る袖〔吾振袖乎〕を妹見

つらむか(2・一三九)

(位格)

朝日照る佐田の岡辺〔朝日照佐太乃岡辺〕に鳴く鳥の夜泣きか

へらふこの年ころを(2・一九二)

大君は神にしませば真木の立つ荒山中〔真木乃立荒山中〕に海

をなすかも(3・二四二)

(状況語)

佐保川の小石踏み渡りぬばたまの黒馬の来夜〔黒馬之来夜〕は

年にもあらぬか(4・五二五)

しかし現代語と比較して、不自然に感じるものも存在する。そのような、現代語ではあまり見られない、あるいは違った解釈がなされる可能性のある連体修飾の例について、万葉集を中心に考察を試みる。

二 被修飾名詞と修飾する動詞の關係に注意すべきもの

まず、連体修飾の例のうち、現代語ではあまり見られないものについて、その被修飾名詞と、修飾部の動詞の關係から、以下に整理し分析を行う。

(1) 被修飾名詞が動詞の目的語に近いもの

「泣く」という動詞について、万葉集によく見られる、次のような表現がある。

① 妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙〔和何那久那美多〕いまだ干なくに (5・七九八)

② 朝日照る佐田の岡辺に群れ居つつ我が泣く涙〔吾等哭涙〕止む時もなし (2・一七七)

③ ……道來る人の泣く涙〔泣涙〕小雨に降れば白たへの衣ひづちて立ち留まり我に語らく…… (2・二三〇)

④ 泣く涙雨とふらなむ渡り川水まさりなば帰りくるがに
「泣く涙」の例は八代集にも見出される。

(古今 16・八二九)

①②は「我が……」とあり、「(他の人ではなくこの)私の流す涙」という「涙」を説明する「外の關係」として処理することも可能である。しかし現代語なら「私が涙を流す」↓「私が流す涙」という格關係が基底にあるのに対し、この「泣く」という動詞と「涙」の關係について少し考える必要がある。古代語の「泣く」は「鳴く」と同源で、当時としては「涙を流す」ことよりも「声をあげる」方に重点があつたかもしれない。ともあれここに挙げた場合は、「泣

く」という作用によって発生したものが「涙」であるといえるが、これを述定に展開して例えば「涙を泣く」という言い方は可能であろうか。集中にそのような用例はないが、声にあげて泣く、「音を泣く」という言い方がある。

⑤ 剣大刀身に添ふ妹を取り見がね音をそ泣きつる〔哭乎曾奈伎都流〕手児にあらなくに (14・三四八五)

⑥ ……夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 音のみを泣きつつありてや〔哭耳呼 泣乍在而哉〕 ももしきの 大宮人は 行き別れなむ (2・一五五 長歌)

もちろんこのヲは現代語とは違い、間投助詞的な性格を併せ持っていたようである。当時まだ助詞ヲは目的格を示す格助詞としての機能が未発達な面もあった。ともあれ「涙」についても「涙を泣く」という用例はないが、なおそれに近いものとしてとらえられる。ほかにも、「外の関係」としてとらえられるものではあるが、

⑦ まずはをの思ひわびつつ度まねく嘆く嘆き〔嘆久嘆〕を負はぬものかも (4・六四六)

という「嘆く嘆き」の例もある。

また「寝る」という動詞について、次のような例がある。

⑧ 思はずもまことあり得むやさ寝る夜〔左奴流欲〕の夢にも妹が見えざらなくに (15・三七三五)

同じ「寝る夜」でも、

⑨ ……大船の ゆくらゆくらに 思ひつつ 我が寝る夜ら〔吾寐夜等〕は 数みもあへぬかも (13・三三二九 長歌)

⑩ さ寝る夜は多くあれども物思はず安く寝る夜〔夜須久奴流欲〕はさねなきものを (15・三七六〇)

これらは述定に展開すると「夜」は時を表す状況語であり、「夜」がなくとも文として成立する、「外的」なものである。また「ゆらゆら揺れて恋しく思いながら私が寝る夜」「物思いをせず楽に寝る夜」という「夜」についての説明、「どのような夜か」を限定するものである。先述した「外的な関係」であり、現代語でも可能な言い方である。このようなものを見る限りは特に問題はないように見える。しかし、「寝」という動詞一語（もしくは主語＋「寝」など）が来て、現代語の感覚からは格関係を想定してしまふようなものについては、「寝る」と「夜」の関係について考える必要が見えてくるのではないか。

万葉集には、

⑪ 今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む〔夜乎将寝宿〕 (3・四六二)

などの例があり、先程と同様に現代語の格関係とは異なるであろうが、「寝る」と「夜」の間に密接な関係がある。

さらに、

⑫人の寝る甘睡うづかみも寝ずて〔人所ひと所ところ寐味宿不い寐〕はしきやし君が目
すらを欲りし嘆かふ (11・三三六九)

のような例もある。これも「家思ふと眠いを寝ず居れば〔伊乎い祢受乎
礼婆〕」(20・四四〇〇)のような例を挙げるまでもなく、「眠—
寝ること—を寝る」という、現代語では効率の悪い表現となる。^(注)

この「泣く」「寝る」はいずれも現代語ではいわゆる「自動詞」
であるが、「涙」「夜」「眠」という被修飾概念から抽出されやすい、
非常に「狭い関係」である。現代語の格関係(目的格)とは言いが
たいが、「内の関係」に近い。

このようなものを今仮に「慣用的表現」とする。

(2) 被修飾名詞が動詞の目的語とも主語ともとれるもの

⑬葛飾の真間の浦廻まへを漕ぐ舟の〔許具布祢能〕船人騒く波立つら
しも (14・三三四九)

⑭垂姫の浦を漕ぐ舟〔許具布祢〕梶間にも奈良の我家を忘れて思
へや (18・四〇四八)

当然のことながら、現代語では、「舟を漕ぐ」という言い方があ
り、「漕ぐ」は他動詞と考えられる。万葉集でも、

⑮青波に袖さへ濡れて漕ぐ舟の〔許具布祢乃〕かし振るほとにさ

夜更けなむか

(20・四三三三)

のようなものならば、「舟」は「漕ぐ」の目的語としてとらえても
よい。この⑬⑭の場合も現代語の格の論理を古代語に持ち込まず、
二重のヲ格を認めてもよい。しかし動詞「漕ぐ」に注目してみると、
当時の「漕ぐ」は舟で移動する、「行く」に近い意味で使われた場
合もある。

⑯斯太の浦を朝漕ぐ舟〔阿佐許求布祢波〕はよしなしに漕ぐらめ
かもよしこさるらめ (14・三四三〇)

「舟」と「漕ぐ」の関係は密接であり、(1)に似ているが、(1)
とは逆に、「漕ぐ」を自動詞とすると「舟」が主語となり、また漕
ぎ手と舟を一体としたいわば「擬人法」のように見ることもできる。
「自他の区別が曖昧なもの」とでもいえようか。

(3) 被修飾名詞が再帰代名詞的なもの

⑰……ますらをと 思へる我も〔念有吾毛〕しきたへの 衣の
袖は 通りて濡れぬ (2・一三五 長歌)

⑱天地に少し至らぬますらをと思ひし我〔思之吾〕や男心もなき
(12・二八七五)

これらは「私」が「ますらお」思っている(あるいは「思ってい
た」)「私自身」と解釈すると「我」は目的格であり、再帰代名詞と

して扱うことができる。また「(私を)ますらおと思つていた私」とすると「我」は「思う」に対する主格となる。日本語は主語が省略されることが多い。主格と目的格を兼ねた、曖昧な言い方だが、古代語ではそれが許容されたのであろう。これらを「被修飾名詞が再帰代名詞的なもの」としておく。

(4) 複文の場合

⑭我が背子と 手携はりて 明け来れば 出で立ち向かひ 夕さ
れば 振り放け見つつ 思ひ延べ 見和ぎし山〔見奈疑之山〕

に……

(19・四一七七 長歌)

「和ぐ」は上二段活用 of 自動詞で「……振り仰いで眺め、気を晴らし、見て心が和んだ山」となる。「見和ぐ」という連語になっており、「山」は「見る」の目的語であり、また「立ち向かふ」「振り放け見る」に対する二格・ヲ格の語でもある。しかし自動詞「和ぐ」と「山」との関係がはっきりしない。

長歌であり、多少非文法的な表現が許される面もあろうが、この例を述定に展開すると「複文」になる。簡単な現代語の例で見ると、

ドアの鍵をかけて、安心した。

これを、

かけて安心した鍵

とはあまり言わない。「安心する」と「鍵」の間に直接の関係がないからであろう。古代語が自由に連体修飾句を作ることができた一例といえようか。なおナグについては他動詞的な用法も見られ、例えば新編全集の注には「あるいは「遊び和ぐれど」(四一一六)のナグと同じく、気を紛らす意の他動詞としての用法か。」としている。これに従えば、「山によつて」(氣を紛らわせた)という具格(よ)によつて)の関係と見ることもできる。

三 連体修飾句における動詞の諸相

ところで、古代語の連体修飾句の中には、被修飾名詞と修飾部の動詞の格関係については現代語と違ひはないものの、現代語ではあまり見られないものがある。すなわち、無標の動詞であっても、現代語に置き換える際、受給表現や可能表現としてとらえられる場合がある。以下にその例を挙げる。

(1) 受給表現としてとらえられるもの

⑮九月のその初雁の便りにも思ふ心は〔念心者〕聞こえ来ぬかも

(8・一六一四)

題詞に「遠江守桜井王奉^三天皇歌一首」とあり、天皇が私を「思う」のであるから、本来はオモホスなどの尊敬語が使われるべきと

ころ、音数の制約からオモフとなつていくということが従来指摘されてきている。

つまり言葉を補えば「(天皇が)私を思う心」となる。和歌という文学表現手法から省略があつてもやむを得ない。前掲の寺村論でいう「外の関係」の例に含まれる。さてさらに進めてこの「思ふ心」を現代語の感覚でとらえるならば「思つて下さる心」のようになろう。受給表現「やる・くれる・もらう」等の補助動詞の発達については中世を待たなければならず、それまでは尊敬語「給ふ」等が用いられていたことは宮地裕の論に詳しい。¹⁰⁷⁾

また次のように敬語表現が無くとも受給表現としてとらえることができる例もある。

②① 難波津に装ひ装ひて今日の日や出でて罷らむ見る母〔美流波々〕
なしに (20・四三三〇)

この「母」は「見る」の主格であるが、現代語では主観的に「見られる母」のような表現が普通であろう。

②② 我がここだ待てど来鳴かぬほととぎすひとり聞きつつ告げぬ君〔不_レ告君〕かも (19・四二〇八)

の例も、「教えてくれない」というニュアンスがある。なお、受身の例は幾つか見られる。

②③ ……日の入る国に遣はさる我が背の君〔所_レ遣和我勢能君〕を……

②④ 打つ田に稗はしまたありと言へど選らえし我〔扱_レ為我〕そ夜ひとり寝る (11・二四七六)

しかし次のものは注意を要する。

②⑤ 武庫の浦の入り江の渚鳥羽ぐくもる君〔羽具久毛流伎美〕を離れて恋に死ぬべし (15・三五七八)

「羽ぐくもる」は「羽ぐくむ」に対する受身動詞であるが、この場合は「羽ぐくもる我」ではなく、具格である「君」が被修飾語になつている。現代語には見られないものである。これも現代語で言うならば「はぐくんできた君」のようなニュアンスになろうか。

(2) 可能表現としてとらえられるもの

②⑥ 妹に恋ひ寝ねぬ朝〔不_レ寐朝〕に吹く風は妹にし触れば我にも触れこそ (12・二八五八)

②⑦ 玉梓の君が使ひを待ちし夜のなごりそ今も寝ねぬ夜〔不_レ宿夜〕の多き (12・二九四五)

これらはいずれも「眠れない朝・夜」の意と解釈できる。また、②⑧ 我が盛りいたくくたちぬ雲に飛ぶ葉〔久毛爾得夫久須利〕食むともまたをちめやも (5・八四七)

②⑨ 垣ほなす人の横言繁みかも逢はぬ日〔不_レ遭日〕まねく月の経

も、「空を飛ぶことができる薬」「逢えない日」と可能の意を含んでいる。このようなものを、佐伯梅友は「結果的表現」と呼び、次のように述べている。⁽⁹¹⁰⁾

老いぬればさらぬ別れもありといへば　いよいよ見まくほ
しき君かな(九〇〇)

この歌の「さらぬ別れ」は、「えさらぬ別れ」の意だといわれる。どうしてそういうことになるかについて、私はこう考えた。すなわち、「さらぬ」というのは自由意志で「さる」(避ける)ことをしないのではなくて、「さる」ことができないために、「さらぬ」という結果になる、その結果の方を表に出した言い方であって、そのため意味をとるには「えさらぬ」(避けられない)とすればよくわかることになるのだ、というわけである。こういうのを、かりに結果的表現と名づけてみたのであるが、これに類するものが他にもあるのである。

世の中を思ひはなれぬほだし(九三九)

風の上に取りか定めぬちりの身は(九八九)

ありはてぬ命(九六五)

神だに消たぬむなし煙を(一一〇二八)

右の、「思ひはなれぬ」「ありはてぬ」「定めぬ」「消たぬ」な

どがそれであって、いずれも自由意志でそれをしないのではなくて、そうしたいと思ってもできないから、結果としてそうしないわけなのである。こういうのは、打消の言い方の場合だけかという点、必ずしもそうではない。

白雲のたえずたなびく峯にだに　住めば住みぬる世にこそ
ありけれ(九四五)

の「住みぬる」は「住めた」という意に見る方がしっくりすると思われるが、これは、住むことができ、その結果として住んでいることを表わしている言い方だからと思うのである。

上代は助動詞ユ(ル)・ラユ(ラル)は受身・可能の意味が未分化な面があり、終止形終止においても可能(あるいは不可能)表現は他の語(アフ・カツ・カヌ)による場合が多い。そこで、連体修飾句においてもこのような無標の形式になるのであろう。

以上のように、連体修飾句において、当時未発達だった受給表現は当然見出されず、また可能表現も「結果的表現」という形で表される。どちらかと言えば客観的な表現が多いといえようか。一方受身の連体修飾句は比較的早くから使われている。

四 解釈に問題を生じるもの(主格と目的格)

次に格関係はあるが、主格か目的格(対格)か問題となりやすい

ものについて見ていく。

③⑩ うつせみし 神に堪へねば 離れ居て 朝嘆く君〔朝嘆君〕

離り居て 我が恋ふる君……

(2・一五〇 長歌 「天皇崩時、夫人作歌一首」)

これなど一見したところ嘆くのは「君」かと思うが、挽歌であり、「私が」朝嘆く君」と「我」が省略されているものである。特に心理的動詞についてはこの種の例が多い。

③⑪ 高円の野辺延ふ葛の末つひに千代に忘れむ我が大君〔和須礼牟

和我於保伎美〕かも

(20・四五〇八)

③⑫ 石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君〔思過倍吉君〕ならな

くに

(3・四二二)

③⑬ 朝に日に色付く山の白雲の思ひ過ぐべき君〔可思過君〕にあ

なくに

(4・六六八)

③⑭ ひさかたの雨は降りしけ思ふ兒〔念子〕が宿に今夜は明かして

行かむ

(6・一〇四〇)

③⑮ 思ふ人〔念人〕来むと知りせば八重むぐら覆へる庭に玉敷かま

しを

(11・二八二四)

またヲ格ではとらえにくいものもある。

③⑯ 千鳥鳴くみ吉野川の川の音の止む時なしに思ほゆる君〔所思

公〕

(6・九一五)

③⑰ 白波の寄する磯廻を漕ぐ舟の楳取る間なく思ほえし君〔於母保
要之伎美〕 (17・三九六一)

「思ほゆ」はその対象が「ハ」「シ」もしくは助詞のない形で提示される。これも精神的なもので、もともと動詞が時枝誠記のいう「対象語格」的なものを要求する^{one}。

以上はいずれも主語「我」が省略されているものとして扱うことができる。

動作動詞の場合も主格か目的格か判断に迷うものがある。

③⑱ 略しつづ君が生ほせるなでしこが花のみ訪はむ君〔波奈乃未等
波無伎美〕ならなくに (20・四四四七)

類想の歌として「霞立つ春日の里の梅の花間に問はむと我が思はなくに」(8・一四三八)の例があり、「訪問しようとする」のは「我」であることから、この歌の本文について古くから誤字説が行われてきた。すなわち「花をのみ賞翫して此に問ふにはあらずとなり、五の句の君はあやまりにて左大臣自らを言へる歎」(岡本保孝『万葉集略解札記』)、「伎美は阿礼の誤ならむ。花ノ為ノミニ此宿ニ来ラム我ナラズといへるなり。古書には往々吾を君と写し誤れり。今も君と写し誤れるを更に伎美と仮字書に改めたるならむ」(井上通泰『万葉集新考』、国民図書株式会社発行のものに拠る)などの説がある。岩波大系も、「吾」君」の誤字例がしばしば見られるこ

とを挙げ、

原作には「吾不有国」などとあつたものを、直接「伎美奈良奈久爾」と誤読したか、あるいは「吾不有国」を「君不有国」と誤写したものを、さらに訓読したかのいずれかであろう。

としている。このような誤字説に対し、『万葉集全注』巻二十(木下正俊担当)は、

この歌の場合、アレ、ワレなどの誤りとする立場は、一つに「花のみ訪はむ」を、花を訪う、と誤解していることもあるが、語の続きについて思慮が不十分な憾みがあるのではないか。

「花のみ訪はむ君ならなくに」という構文の中の「君」が連体修飾部の動詞訪フの主格とは限らず、対格ということもあり得るであろう。言い換えれば、訪ハムと「君」との間の格関係を関係代名詞で表せば、 $\epsilon\mu\mu\circ$ ではなく $\epsilon\mu\mu\circ\text{日}$ と見ればよい。と、被修飾語「君」が「訪はむ」の目的語であることを述べている。

さらに実際に本文異同の問題がからむ場合もある。

③⁹⁹ 白菅之真野乃椋原心従毛不念吾之衣爾措(7・二三五四)

この第四句、本文「吾」となっているものは元類広神であるが、訓はいずれもキミとなっている(元は訓「君は」の右に「われか」とある)。本文が「君」とあるのは宮細西陽矢京(西は左に「吾^{キミ}」)で、訓もキミとなっているが、西陽矢は右に「ワレ^{キミ}」の記述が

あり、六条本では「吾」であつたことがうかがわれる。

これも先程と同様、主格か目的格かという問題になる。「吾」「君」それぞれの本文に即して、簡単にまとめると次の四通りの解釈が考えられることになる。

① 吾(主格) 「全く思っていない私が衣に摺ってしまった」
(男性が女性に詫げる)

② 吾(目的格) 「全く思っていない私を衣に摺った」
(女性が男性を問いつめる)

③ 君(主格) 「全く思っていないあなたが(私を)衣に摺った」
(①の内容を女性側から詠む)

④ 君(目的格) 「全く思っていないあなたを衣に摺った」
(詫げる内容)

万葉集の本文異同に関するこれまでの研究から考えると、非仙覚本に「吾」とあることから、原本には「吾」であつたのが、訓「きみ」に引かれて意改された可能性が高い。そこで①か②ということになるが、ここでは、何故「君」と意改されたという点に注目したい。

最初に挙げた例だが、現代語では「次郎がなぐつた太郎」という言い方はあまり用いられず、どちらかといえば「次郎になぐられた太郎」の方が使われるようである。これは逆に述定に転換すると

「太郎が次郎になぐられた」となり、「太郎」が主格になる。つまり非連体修飾語を主格に据えることができるような言い方が主流である。

現代語ほどではなくとも、時代が下るにつれ、主格と目的格の両方が想定される場合は主格の方が優先される傾向があつたのではないか。また現代語でわかりやすく表現すれば、受給表現「思つてくれないあなた」という発想が根本にあつたと思われるが、それが万葉集古写本時代の表現では「思はぬ君」となつたのではないか。なお万葉集の他の心理的動詞の例では潜在的主語「我」が省略された、被修飾語が目的格である場合が多く、ここも①だけでなく、②の可能性も捨てきれない。後考を待つ。

記紀歌謡にも解釈が揺れがある例がある。

④あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下婢ひに 我が婢ふ妹を 下泣きに 我が泣く妻〔和賀那久都麻〕を 昨夜こそは 安く肌触れ

(記允恭 歌謡番号七八 允恭紀にも重出)

引用は日本古典文学大系に拠る)

軽太子と衣通王の密通の話であるが、この「我が泣く妻」について「我が」を「妻」の所有格と見る説(日本古典文学大系など)と「泣く」の主格と見る説(新潮集成など)がある。なお「我が婢ふ

妹」についても両方の説が考えられるが、「とふ」の語、また前後の内容から「我が」は主格、「妹」を目的格としてよいと思う。

このような場合、文法的にはどちらとも判断ができない。文脈から判断できる場合もあろうが、ここはどちらともとれる、曖昧な表現である。ただ、先に挙げた例から考えて、上代は後世と比較して被修飾語が目的格の場合が案外にあつたようである。

動作動詞「逢ふ」についても、主格か目的格かという問題がある。例えば、

①行けど行けど逢はぬ妹〔不相妹〕故ひさかたの天露霜に濡れにけるかも (11・二三九五)

についても、二通りの解釈が考えられる。「妹」を主格として、

①(妹が作者に)逢わない

というのと、「妹」を目的格にとり、

②(作者が妹に)逢わない

という場合である。

この「逢ふ」という動詞は、現代語では「〜に会う」というが古代語では「〜が会う」、つまり「相手(自分に)会う」という言い方も行われていた。この両者の違いについては中川ゆかりの論がある。古くは本居宣長が「古事記伝」(十六之巻 木花之佐久夜毘売の段など)で、古代は偶然の出会いについて「相手が会う」と言っ

たことを指摘しており、それを承けて多くの用例について精緻な考察を行い、

記・紀・萬葉の時代においても、偶然の出会いを「相手がアフ」と言う場合もあるし、「相手にアフ」と言う場合もある。両者は時代を遡っても共存している。したがって、両者の違いはあくまで表現の姿勢の違いによる。すなわち、「相手にアフ」が出会いを客観的に述べたものであるのに対して、「相手がアフ」は自らの意志を越えた突然の出会いを、驚きの感情をこめて眼のあたりに述べたものであると言えよう。

連体修飾の場合は、「相手がアフ」「相手にアフ」どちらともとれるニュートラル（中間的）なものである。ただこの例は恋愛の歌に多く見られ、相手の意志に委ねられていることが多いように思われる。そこで歌の作者から見ると「逢えない」あるいは「逢つてくれない」という、可能や受給のニュアンスとなり、どちらかといえば主格としてとらえられる場合が多いかもしれない。

この「逢ふ」の例は、他にも以下のようなものがある。

④②……朝露に 玉裳はひびち 夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅寝
かもする 逢はぬ君（不_レ相君）故 （2・一九四 長歌）

④③春の野に霞たなびき咲く花のかくなるまでに逢はぬ君（不_レ逢

君）かも （10・一九〇二）

④④天の川瀬を速みかもぬばたまの夜は更けにつつ逢はぬ彦星
（不_レ相牽牛） （10・二〇七六）

④⑤はしきやし逢はぬ君（不_レ相君）故いたづらにこの川の瀬に玉
裳濡らしつ （11・二七〇五）

④⑥……恋ひしくも 著くも逢へる隠り妻（相隠都麻）かも （13・三三六六）

最後の例は完了の助動詞が用いられ、「逢つた妻」という表現だが、これもまた「結果的表現」の一つで、「逢えた」の意となるであろう。

和歌という文学表現においては、潜在的主語「我」の存在することが多く、そこで「朝暎く君」のような表現が可能であった。それが「思わぬ吾」のように「吾」の省略として処理できないものは、主格か目的格か、判断に揺れが生じやすいようである。特に歌謡などは伝承の過程で男女の立場が入れ替わることもあり、曖昧さが好まれたという側面もあろう。

五 むすび

以上、万葉集の連体修飾のうち、現代語と比較した際に問題となるもの、また解釈上注意すべきものについて見てきた。個々の問題

について更に検討する必要がある、和歌以外の文学作品の用例等も調べる必要がある。今後の課題としたい。

なお佐伯梅友の挙げた「恋ふる涙」のような例も、「我」の省略と見て「私が」恋しく思う涙」と、外の関係に近い省略とみるとわかりやすい。たかはしたろうも、

いなかの炉辺で灰をかきならすとおなじ手つきでおかあさんは
兄とむかいあつた長火ばちの灰をていねいにかきならしながら、

〔島崎藤村「桜の実の熟する時」〕

友だちがきているらしい三四足の男けたをよけて、すみからあ
がった。
〔佐多稲子「くれない」〕

などの例を挙げて、「省略なのだろう」としている。現代語においても文学的表現においては文法の枠を越えることがある。

〔注〕

(1) 以上の用例は、竹内美智子「修飾構成の史的展開」(『講座日
本語学2 文法史』一九八二年四月 明治書院)より引用した。

(2) 三上章の用語。「象は鼻が長い」一九六〇年十月 くろしお
出版。一九八九年六月第十八版によると九頁以下。

(3) 「連体動詞句と名詞のかかりあいについての序説」(『言語
の研究』一九七九年十月 むぎ書房 所収)一五〇頁。

(4) たかはしたろう注3前掲論文。この用例を挙げ、

動詞句と名詞の対の場合に、名詞にうけかたをしめす格形
式がないということによっておこる制限のきびしさだろう。

したがって、いくつかの、おなじカテゴリーカルな意味をも
つ、ことなった格の名詞を支配しうる動詞の場合には、こ
の種の制限がきびしくなるのである。(一五二頁)

と述べている。また、寺村秀夫「連体修飾のシンタクスと意味
——その2——」(『日本語・日本文化』5号 一九七七年)に
も分析がある。

(5) 「連体修飾のシンタクスと意味——その1——」(『日本語・
日本文化』4号 一九七五年)。

(6) 竹内美智子注1前掲論文にも、状況語の中には装定への転換
が行われにくいものがあることについて、「述語にとって「外
的」な要素であるものほど、述定から装定への転換の際に変容
〔略〕されたり疎外されたりする傾向がある。」とある。

(7) 佐伯梅友「連体修飾語の場合」(『古典文学大系 古今和歌集』
解説五〇〜五一頁)。

(8) なお、

秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる〔此宿流〕朝開の風は
手本寒しも (8・一五五頁)

の歌について、「この寝ぬる」を「朝」の準枕詞と見る説（増訂本新考）、また枕詞と見る説（佐佐木評釈）があり、それに對し沢瀉注釈では「これは寝て起きた朝とつゞく意で枕詞と見ない方がよいと思ふ」としている。新編全集によると、「日葡辞書」に、

Conone nuru. (この寝ぬる) 時間のことなどかまわな
いで、自由気ままに眠る。詩歌語。

という記述がある。これも「朝（朝明）」を目的語に近いものととつてよいのではないか。「この朝明」と「この」があり、その分現代語に近く、臨場的な感じがする。

(9) 「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」發達の意味について」（鈴木知太郎博士古稀記念 国文学論攷）一九七五年十月 桜楓社）、「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」（『國語学』六三集、一九六五年十二月）。

この他に、

あしひきの山行きしかば山人の朕わがに得しめし山づと（山人
乃和礼爾依志米之夜麻都刀）それ （20・四二九三）

の例も、使役表現を使っているが、神樂歌には、

逢坂を今朝こえくれば山人の我にくれたる山杖（山人乃王

礼仁久礼多留也万津恵）ぞこれ

（歌謡番号 九 引用は岩波大系『古代歌謡集』に拠る）
となつている。これも受給表現の發達を見る一例であろう。

(10) 『古典文学大系 古今和歌集』解説四九―五〇頁。またこの「結果的表現」について、吉井健の発表「結果的表現」をめぐつて（『國語語彙史研究会 第五十五回 一九九七年四月二十六日』）がある。

(11) 佐竹昭広「上代の文法」（『日本文法講座3 文法史』一九五七年十二月 明治書院）など。

(12) 本稿では取り上げなかったが、形容詞の連体修飾の場合も、主格か「対象語格」か説が分かれることがある。源氏物語「須磨」の、

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

（引用は新潮日本古典集成に拠る）
について、時枝誠記は、源氏たちが、都の人たちを恋しがつて泣く自分たちの姿と鳴く雁を重ねているという解釈から、

「恋しき人」は、「都を恋うてゐる我々」の意味に解さなければならぬ。諸注、「恋しき人」を、「我が恋しく思ふ都の人たち」の意に解するところから、自他が転倒してしまつたのである。

（『日本文法 文語篇』 一九五四年四月

としている。しかしこも「人」を対象語格と見てよいと思う。

(13) 木下正俊「万葉集写本の意改」(『文学』四十八巻二号 一九八〇年二月)などに、万葉集古写本において訓に引かれて本文が「意改」されることが述べられている。

(14) 「出会いの表現」(『万葉』百十九号 一九八四年十月)。

(15) たかはしたろう注『前掲論文』、一〇八頁。

付記 小稿は第二十五回万葉有志研究会(一九九八年三月七日 於神戸松蔭女子学院大学)における発表に手を加えて成ったものである。発表後諸先生方からご教示いただいた。記して感謝の意を表す。

(かぎもと ゆり／本学非常勤講師)